

# 主題階層, VP-shell, Split VP と諸構文の派生

藤 本 滋 之

## 0. はじめに<sup>1</sup>

本稿では、動詞句の基本構造と、そこから各種の構文がどのように派生するかを考察する。1節では、VPの基本構造として、主題階層をVP-shellに組み込んだ構造 (cf. 加賀 2001, 2007) に、Travis (2010) におけるような AspP を想定する split VP の構造を組み合わせたものを仮定する。2節では、主題階層を構成する三つのマクロな主題役 (Agent, Location, Locatum) をすべて有する構文の代表として、場所格交替構文と与格交替構文の構造を分析する。3節では、Agentを除く二つの主題役から成る構文の代表として、場所格倒置構文と There 構文の構造を議論する。

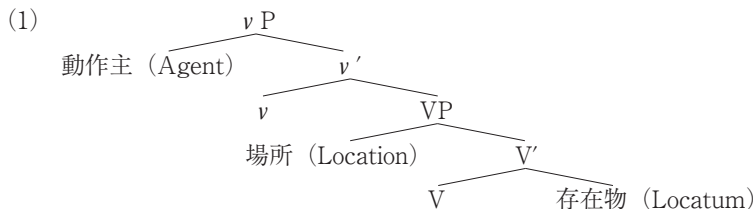
## 1. VPの構造

### 1.1. VP-shellと主題階層

生成文法で基底構造つまり argument が Merge する順序の決定にかかわる原理として、Baker(1988)の UTAH (uniformity of theta assignment hypothesis) があるが、これは、Baker 自身も認めているように、主題関係が統語構造に反映されることを規定しているものの、具体的にどのような主題関係がどのように統語構造に反映されるのかについては触れていない (cf. Kaga 2007)。加賀 (2001) や Kaga (2007) によると、動詞句の基底構造は VP-shell の構造と主題役の階層によって決まる。図に示すと (1) のとおりである。

---

<sup>1</sup> 本稿は日本英文学会九州支部第 67 回大会 (2014 年 10 月 25 日、福岡女子大学) シンポジウムの発表原稿に加筆したものである。本研究を進めるに際しては、インフォーマントとして Cynthia L. Daugherty 氏 (西南学院大学文学部准教授) にたいへんお世話になった。また、シンポジウム講師の福田稔氏 (宮崎公立大学教授)、中村浩一郎氏 (名桜大学教授) をはじめ、聴講して頂いた方々から多くの貴重な御助言を頂いた。改めて厚く御礼申し上げたい。



加賀 (2001)、Kaga (2007) は、主題役を〈動作主 (Agent)〉、〈場所 (Location)〉、〈存在物 (Locatum)〉の三つに限定する「マクロな意味役割 (semantic macroroles)」(cf. van Valin 1999) を採用している。〈動作主〉には従来の〈動作主 (Agent)〉と〈原因 (Cause)〉が含まれ、〈場所〉には従来の〈場所 (Location)〉のほか、〈着点 (Goal)〉、〈起点 (Source)〉、〈経路 (Path)〉、〈受益者 (Benefactive)〉、〈経験者 (Experiencer)〉、〈被動作者 (Patient)〉が含まれる。最後に、〈存在物〉は、従来の〈主題 (Theme)〉であり、移動物や出現・存在するものである。

加賀 (2001)、Kaga (2007) は、上記三つの「マクロな意味役割」の間に、〈動作主〉が最も高く、〈場所〉を中間に置き、〈存在物〉が最も低い上下関係、すなわち Jackendoff (1972) で提案されたような「主題階層」(thematic hierarchy) が存在することを仮定しており、このマクロな意味役割の階層を統語構造に投射したものが、動詞句の基本構造(1)になる。これはいわゆる VP-shell 構造 (Larson 1988, Hale and Keyser 1993, 2002, Chomsky 1995) であり、この基本構造から動詞繰り上げや格素性照合のための名詞句の移動が起こって、様々な語順の動詞句が生じることになる。

ここで(1)の構造について、次の二つの問題を指摘したい。

(2) 構造(1)の問題点

- a. 目的語 DP の格照合の仕組み：VO 語順の説明
- b. 目的語 DP の選択の仕組み：〈場所〉 or 〈存在物〉？

一つは、(2a) にまとめたように、目的語 DP の格の照合のメカニズムに関する

ものである。VP-shell の構造(1)では、目的語 DP の格照合がどのようにして行われるのか、説明が難しいように思われる。仮に Spec, *v*P に目的語 DP が移動して格照合が行われるとしても、動詞の T への繰り上がりが無い現代英語では VO の語順を説明できない。

(1)の構造のもう一つの問題は、上記(2b)にまとめたように、《場所》と《存在物》のどちらが目的語 DP となるのか、どのようにして決まるのかということである。(3)の例を見よう。

- (3) a. We loaded the car with our baggage.  
 b. We loaded our baggage into the car.

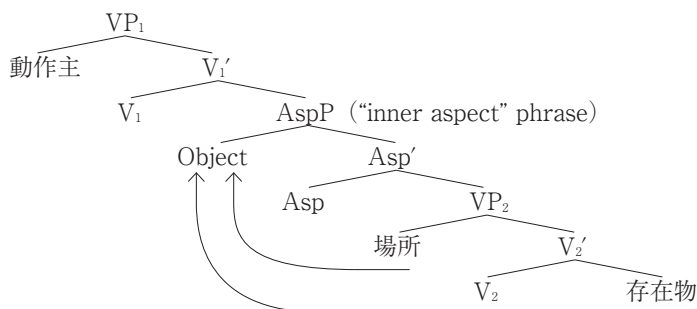
(3)の例は、三つの主題役《動作主》、《場所》、《存在物》のすべてが揃った文である。(3a) と (3b) は共に同じ主題構造でありながら、目的語 DP になっている項が、それぞれ a では《場所》、b では《存在物》を担っている。《場所》と《存在物》のどちらが目的語として選択されるのかについて、その原理を探る必要がある。

以上、本節 1.1 では VP-shell の構造(1)の問題を二つ指摘した。次の節ではこの問題を解決する構造を導入する。

## 1.2. Split VP と目的格照合

目的語 DP の格照合を精密に分析した研究に Travis (2010) がある。本稿では Travis に従い、(4)のような VP の構造を仮定するものの、主題役の基底位置つまり Merge の順序は加賀 (2001), Kaga (2007) を採用し、存在物 (Locatum) を最下位とし、場所 (Location) を上位とする。

(4) Split VP (Travis 2010)



VP の構造(4)の特徴は、VP-shell を構成する二つの V の間に Aspect Phrase の存在を仮定することである<sup>2</sup>。Travis(2010)は、Asp と表示するこの範疇を、現代英語の完了形や進行形といった文法的なアスペクトと区別して“inner aspect”と呼ぶ。この範疇は、VP の意味に基づくアスペクト特性、つまり telic / atelic の区別と、目的格の照合にかかわるものである。目的語 DP は図(4)の存在物あるいは場所が Aspect Phrase の Spec に移動して格照合を受ける。

VP の構造(4)における Asp(ect) head は、動詞句のアスペクト特性と内項の格照合に関わることになるが、アスペクトと内項の範疇や格の間に相関関係があることを示す例は少なくない。日本語でも、(5)のように状態動詞の目的語だけがガ格をとる (Uesaka 1996: 102 & Hirakawa 1994: 4, quoted in Travis 2010: 3)。

(5) 目的格とアスペクト特性 (telicity) の相関を示唆する例：日本語

- a. ジョンがおもちゃを壊した。(non-stative)
- b. ジョンが日本語が好きだ。(stative)

中国語でも(6)のような交替が観察される(便宜上日本語の漢字を用いている)。

<sup>2</sup> VP を二つの V に分離し、その二つの V の間に機能範疇を認める分析として Koizumi (1993, 1995) の“Split VP hypothesis”がある。

(6) 目的格とアスペクト特性 (telicity) の相関を示唆する例：中国語

- a. 張三 送了 李四 到学校 (張三は李四を学校まで送った。)
- b. 張三 把 李四 送到了 学校 (張三は李四を学校まで送って行った。)

(6a) の下線部は前置詞句であるが、(6b) の下線部は名詞句である。(6b) はいわゆる把構文で、李四が学校に到ったことを表すのに対し、(6a) は到達の意味を含まない。

アスペクトと統語範疇の相関関係は、(7)の例のように英語でも観察される。

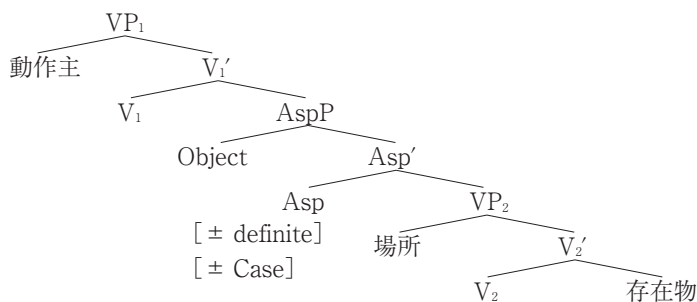
(7) 目的格とアスペクト特性 (telicity) の相関を示唆する例：英語

- a.\*The hunters shot *the deer* for five minutes. DP：到達
- b. The hunters shot *at the deer* for five minutes. PP：非到達

(7)の例にあるような *for*-phrase と共起できる述語のアスペクトは atelic である。内項の範疇が、(7a) の文のように DP の場合は述語のアスペクトが telic であるため *for*-phrase と相容れない。他方、(7b) の文のように内項が PP の場合は atelic になり *for*-phrase と共起して問題ない。

そこで Travis (2010) は、(8)に示すように、Aspect head が [± Case] という目的格を照合する素性と、[± definite] あるいは [± telic] というアスペクトにかかわる素性をもつと考えている。Travis が考えているアスペクト素性が一様でないのは、言語による違いを考慮してのことかもしれないが、英語を中心に考察する本稿では、inner Asp head のもつ素性を [± definite] と考えることにする。なお、格素性は [φ] 素性の照合によって値が決まるという、現在のミニマリストの標準的な分析を採用すると、Travis のように [± Case] ではなく [φ] 素性の有無とする方が適切であるが、ここでは Travis に従うことにする。

(8)



目的語の definiteness と telic / atelic といったアスペクト特性の相関関係を示す例として(9)や(10)がある。

(9) 目的語の definiteness とアスペクト特性 (telicity / affectedness) の相関

- a. John loaded the hay onto the truck, but there was still room inside.
- b. ??John loaded the truck with the hay, but there was still room inside.

(Definite object : 場所全体の状態変化)

(有村他 2009: 105)

(9)の a と b の容認度の対立は、動詞の表す行為の結果として《場所》の状態に変化が起こるものは DP として表れるのに対し、《場所》の状態に変化が起こらないものは PP として表れることを示している。他方、(10)が示すように、目的語が状態変化を伴う現象は、《存在物》の場合も観察される。

(10) a. ??John loaded the hay onto the truck, but there was still some hay

left in the barn. (Definite object : 存在物全体の移動)

- b. John loaded the truck with the hay, but there was still some hay left in the barn.

(10)の a と b の容認度の対立は、《存在物》についても DP と PP とで意味的

な違いが存在することを示している。すなわち、(10a) のように《存在物》を担う項が DP の場合は、存在していたものがすべて移動してしまうことを表すのに対し、(10b) のように《存在物》が PP の場合はそうでない。このことから、目的語 DP になるのは、《場所》にせよ《存在物》にせよ状態や存在する位置が変化して、一定の状態や位置に到る telic な場合であると言える。

以上のような definiteness と telicity の関係を組み込んだ動詞句の構造を仮定した上で、以下では、多様な構文がどのようにして派生するかを考察したい。

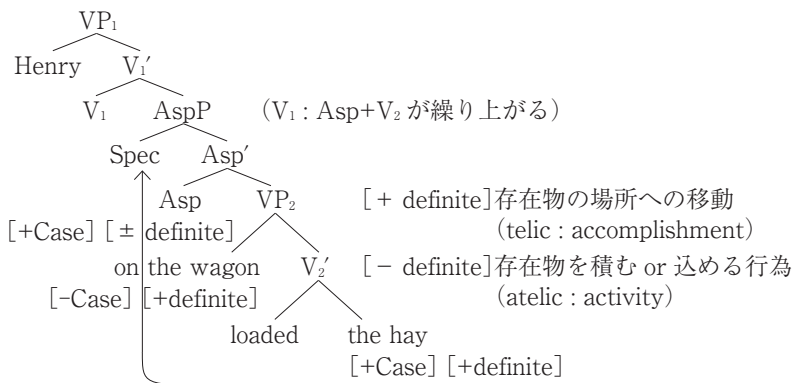
## 2. 三つの主題役が揃った構文

まず、(11) のような場所格交替構文の構造と派生を考察する。

- (11) a. Henry loaded the hay on the wagon.  
 b. Henry loaded the wagon with the hay.

はじめに (11a) の派生を検討する。(11a) の表す意味は「《存在物》 hay が移動して《場所》 the wagon に移動するように《動作主》 Henry がする」と一般化できる。このとき《存在物》が DP になり、VP の構造は(12)のようになる。(12)の Aspect head の素性が [±definite] となっているのは、(11a) における動詞 load が telic な accomplishment verb の意味と、atelic な active verb の意味の両方を持ち得るからである。accomplishment verb としての load の意味は「《存在物》をどこかに移動させる」という意味である。他方、active verb としての load の意味は「《存在物》をどこかに or あるものに詰める行為をする」という意味である。

(12) (11a) の派生



(a) Asp の素性                      AspP 内の可能な語順    cf. maximize matching effects

- [+ Case] [+ definite] ① *load the hay on {the / a} wagon*  
 ② *load hay on the wagon / load on the wagon hay*  
 ③ ? *load hay on a wagon*

→① definite DP は必ず V の直後に生起: 存在物全体の移動の解釈 (telic)

(b) Asp の素性                      AspP 内の可能な語順    cf. maximize matching effects

- [+ Case] [- definite] ① *load hay on {the / a} wagon*  
 ② *load on a wagon the hay / load the hay on a wagon*  
 ③ ? *load the hay on the wagon*

→① indefinite DP は V の直後に生起: 存在物全体の移動の解釈無し (atelic)

(12)において、Aspect head のもつ素性が [+Case] と [+definite] の場合は、同じ素性の組合せをもつ DP (the hay) が Aspect Phrase の Spec へ移動して照合し、V<sub>2</sub> も Aspect head へ移動する。次に V<sub>1</sub> が Aspect Phrase と Merge し、V<sub>2</sub> と一緒になった Aspect head も V<sub>1</sub> に繰り返り他動詞 (loaded) となる。最後に主語 DP (Henry) が Merge し (11a) の動詞句が完成する。(11a) の語順は、上記 (12a) に示した Aspect Phrase 内の可能な語順のうち ① に当たる。ここで、DP が the hay ではなく hay だったとしよう。indefinite であるから Aspect head

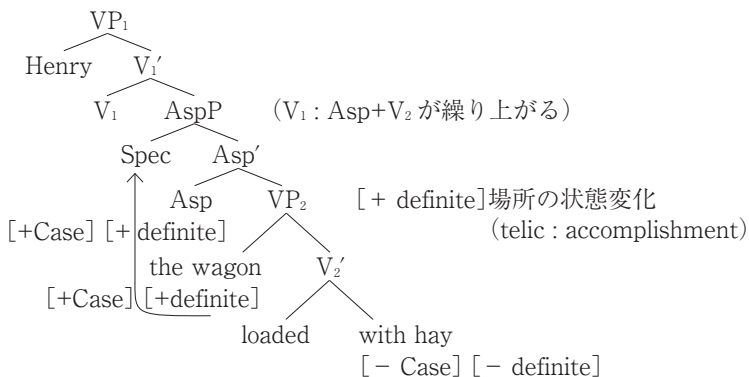


のAspect素性[+definite]と match せず、PP (on the wagon)の方が match することになる。この場合、DP と PP では照合できる Aspect head の素性が一つずつであるから、Maximize Matching Effects(Chomsky 2001a)、つまり、派生のある段階で移動の動機を有する要素が複数あるとき、移動によって照合される素性が最も多いものが選ばれるという economy の原理の観点からすると、どちらが Aspect Phrase の Spec に上がってもよい。②の場合がこれに当たる。最後に、PP も DP も indefinite の場合は Aspect head の素性[+definite]が照合されずに残るので容認されないと考えられる。③がこれに当たる。結果として DP が definite なら必ず V の直後に生起することを予測する。この場合、存在物全体の移動の解釈が得られるので、telicity にかかわる項が目的語 DP になり、しかも動詞との隣接性が強いと言える。

他方、Aspect head の素性が [+Case] と [-definite] の場合の派生は次のように考えられる。DP が hay なら [-definite] であるから、DP は Aspect head の持つ二つの素性をどちらも照合できる。したがって、PP の definiteness にかかわらず DP が上がり DP PP の語順が得られる。(12b) に示した①がこれに当たる。次に DP が the hay つまり [+definite] であれば、照合できる Aspect head の素性は [+Case] 一つだけであるから、PP が indefinite なら②のようにどちらの語順もあり得る。最後に DP も PP も definite の場合は、どちらも Aspect head の [-definite] を照合できず容認されないことになる。③がこれに当たる。atelic な述語の場合に DP が indefinite なら必ず動詞に後続すると言えるわけで、この場合も telicity にかかわる項が目的語 DP となり、しかも動詞との隣接性が強いと言える。

次に、(11b) つまり「場所」が目的語の文の派生を考える。(11b) の load の意味は「場所」を loaded な状態にする」ということである。このとき「場所」が DP になり、VP の構造は(13)のようになる。「場所」の状態変化を表すので到達点がある telic な状況を表す。したがって、Aspect head の素性は[+definite]と仮定する。(13)で Aspect head が Merge した際、格素性 [+Case] とAspect素性[+definite]を照合するため、同じ素性をもつ DP (the wagon) が Aspect Phrase の Spec に移動する。

(13) (11b) の派生: telic (accomplishment) の解釈のみ → [+definite] のみ



Asp の素性

AspP 内の可能な語順 cf. maximize matching effects

[+Case] [+definite]

① load the wagon with {the / φ} hay

② load a wagon with the hay/load with the hay a wagon

③ ? load a wagon with hay

→① definite DP は必ず V の直後に生起: 場所の状態変化 (telic) の意味

→② indefinite DP と definite PP の場合に DP が後置される可能性を予測

ここで、(11a)の場合と同様に Aspect Phrase 内の可能な語順を確認すると、(13)の構造図の下に記載の①~③となり、結論として、DP が definite なら、PP の definiteness にかかわらず、必ず動詞の直後に生起することを予測する。つまり、ここでも telicity を決める項が目的語 DP となり、しかも telicity にかかわる definite DP と動詞の隣接性が強いことがわかる。

以上、場所格交替構文の派生を考察した。次に与格交替構文(14)の派生を考察する。

(14) a. Jane sent Bill a long letter.

b. Jane sent a long letter to Bill.

この文も場所格交替構文と基本的には同じ状況、すなわち《動作主》が、あ

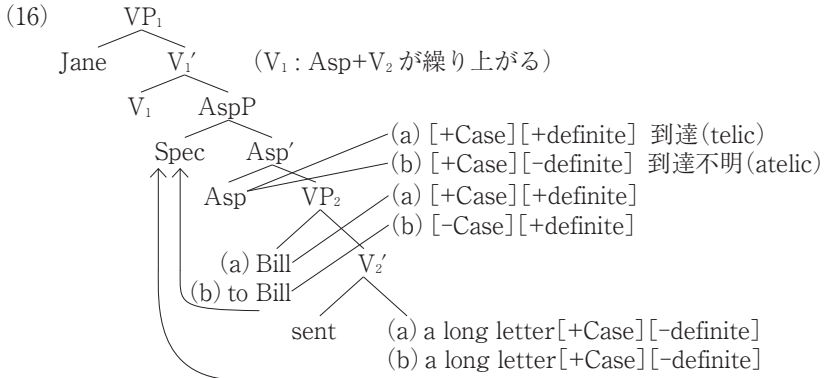
る〈場所〉に〈存在物〉を移動させる状況を表している。違いは、与格交替構文においては〈存在物〉が常に名詞句であり、〈場所〉を担う句だけに名詞句と前置詞句の交替がある点である。

与格交替構文の場合も、〈場所〉を担う項が DP か PP かによって telic/atelic の対立がある。(15a) のように到達する〈場所〉も DP の場合は、知識が Paul に到達したことを表すのに対し、(15b) の前置詞付き構文では、〈場所〉が PP であり到達を含意しない。

(15) 二重目的語構文における telicity (場所への到達) (Travis 2010 : 45)

- a. \*Mary taught Paul French, but the idiot still doesn't speak it properly.
- b. Mary taught French to Paul, but the idiot still doesn't speak it properly.

(14) の二つの文の構造と派生は(16)のようになる。



- (a) Asp の素性                      AspP 内の可能な語順    cf. maximize matching effects
- [+Case] [+definite]    ① *send Bill a long letter* (V<sub>2</sub> に格付与能力)
- ② *send Bill the long letter*
- ③ ? *send a girl a book* (有村他 2009 : 98)
- ④ ? *send a girl the long letter*
- cf. provide Bill *with* a long letter

→① & ② definite DP は V の直後に生起：場所 DP の状態変化 = 到達

→③ & ④ indefinite DP の容認度が下がる

(b) Asp の素性                      AspP 内の可能な語順    cf. maximize matching effects

[+Case] [-definite]

① send a long letter to Bill

② send the long letter to Bill

③ send a long letter to a girl

④ send the long letter to a girl

cf. send *it* to { a/the } customer

→①～④ definite / indefinite の違い無し：到達の有無に関与せず

(16a) の二重目的語構文の場合、〈存在物〉の〈場所〉への到達を表すので、Aspect head の持つアスペクト素性は [+definite] と考えられる。これと格素性を照合するため、同じ素性をもつ DP (Bill) が Aspect Phrase の Spec へ移動する。VP<sub>2</sub> にはもう一つ DP (a long letter) があるが、照合できる素性が [+Case] 一つなので、二つ持っている Bill に敵わない。(16) の図の下の (a) にある①がこれに当たる。直接目的語が definite つまり the long letter だったとすると、照合できる素性が同じになるが、Aspect head に近いほうが移動すると仮定する。②の場合がこれに当たる。なお、二つの DP が共に indefinite の場合③や、definiteness が逆転した④の場合は容認度が下がる。③では二つの DP がともに [-definite] なので Aspect head の素性 [+definite] を照合できない。④では、より近い位置にある DP (a girl) が Aspect Phrase の Spec に上がっても、Aspect head の素性 [+definite] が照合されない。なお、〈存在物〉を担う DP (a long letter) は、Kaga (2007) に従い、V<sub>2</sub> から目的格を付与されるものと仮定する。このように、与格交替構文の場合も、二つの内項の definiteness と語順の相関関係が、格素性とアスペクト素性をもつ Aspect Phrase を仮定することで説明されると言える。

他方、(16b) では、Aspect head のアスペクト素性は [-definite] と仮定される。二重目的語構文と違い、〈存在物〉の〈場所〉への到達を表さないから

である。これと格素性 [+Case] を照合するため、同じ素性をもつ DP (a long letter) が Aspect Phrase の Spec へ移動する。これが(16)の図の下の(b)にある「AspP 内の可能な語順」の①の場合である。以下、これ以外の definiteness の組合せと可能な語順を確認すると②~④のようになる。PP, DP のどちらも definite な②は out を予測するが、実際は容認される。これは、[-definite] というよりも definiteness に関する指定がない (underspecified)、つまり [+definite] と [-definite] のどちらもあり得るとい見方のほうが妥当かもしれないことを示唆している。前置詞付きの与格構文では、到達したかもしれないし、到達しなかったのかもしれないのであるから。

以上、2 節では、三つのマクロな意味役割をすべて備えた構文の代表として、場所格交替構文と与格交替構文の構造と派生を考察した。結論をまとめると次のようになる。

- (17) 結論：問題(2)の解答 (a, b) + Asp head の素性の影響(c)
- a. VO 語順：場所>存在物の基本語順から DP が Spec, AspP に移動
  - b. 目的語 DP：telicity を決定する項（場所の状態変化があれば<場所>；存在物の移動があれば<存在物>）
  - c. telicity を決める Asp head の definiteness 素性が語順に影響

その結果、1 節(2)に挙げた二つの問題のうち、一つ目は (17a) のように解決された。二つ目の問題は、(17b) にまとめたように、telicity を決定する項が目的語 DP になるという解決を提案した。これに加えて、(17c) にまとめたように、telicity の決定に関与する Aspect head の definiteness 素性が動詞句内の語順に影響することも明らかになった。

本節の最後に、主語選択の仕組みを確認しておきたい。本節で見た他動詞や非能格動詞のように、V<sub>1</sub> の投射がある場合は<動作主>が必ず主語になる。これは、下記(18)に示したように、V<sub>1</sub> を phase head と仮定し、PIC(19)を仮定することで説明される。

## (18) 主語選択の仕組み

$V_1$  の投射がある他動詞文と非能格文：〈動作主〉が主語

$V_1$  = phase head

→ PIC (19)により  $V_1$  の補部 AspP は inaccessible

→ AspP 内の〈場所〉や〈存在物〉は Spec, TP に移動不可

(19) PIC (Phase Impenetrability Condition) : In phase  $\alpha$  with head H, the domain of H is not accessible to operations outside  $\alpha$ , but only H and its edge. (Chomsky 2000)

$VP_1$  を phase とすると、他動詞や非能格動詞の場合、phase head  $V_1$  が Merge され、Wh 素性や Topic 素性等をもつ phrase が phase edge に移動した後、 $V_1$  の complement すなわち Aspect Phrase が Spell-Out され transfer されるので、(19)により、その後の operation は Aspect Phrase 内にアクセスできない。したがって、 $VP_1$  に T が Merge した際、TP Spec に移動できるのは、phase head  $V_1$  の edge すなわち  $VP_1$  の Spec にある〈動作主〉だけである。他方、次の節で考察する非対格動詞の場合、 $V_1$  がないので phase は存在しない。したがって、T が Merge した段階でも動詞句内、つまり Aspect Phrase 内の要素はアクセス可能であり、〈場所〉と〈存在物〉のどちらも TP Spec に移動し得る。

以上、2 節では、三つの主題役が全部揃った場所格交替構文と与格交替構文の派生を検討した。3 節では、Agent を除く二つの主題役から成る構文の派生を考察する。

## 3. 二つの主題役から成る構文

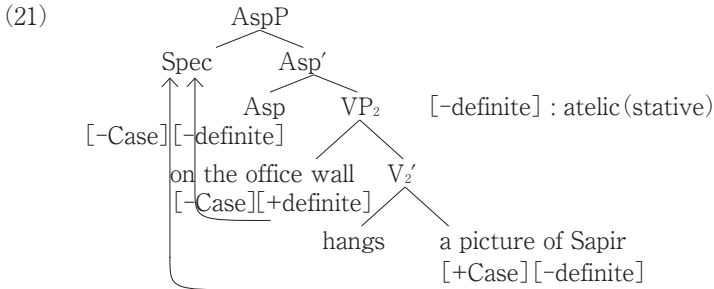
本節では二つの主題役〈場所〉と〈存在物〉から成る構文の代表として、場所格倒置構文と There 構文を考察する。両構文は、存在を表す場合と出現を表す場合に分けられる。本節の前半で存在を表す場合を、後半で出現を表す場合を考察する。

### 3.1. 存在を表す場所格倒置構文と There 構文

はじめに、(20)のような存在を表す場所格倒置構文の派生を考察する。

- (20) a. On the office wall hangs a picture of Sapir.  
 b. A picture of Sapir hangs on the office wall.

場所格倒置構文 (20) の動詞句の構造と派生は(21)のようになる。《動作主》を持たない非対格の文では上の動詞  $V_1$  が存在しないと仮定する (cf. Citko 2014)。また、存在を表す場合、Aspect headのアスペクト素性は [-definite] と考えられる。



Asp の素性

[- Case] [- definite]

AspP 内の可能な語順

cf. maximize matching effects

- ① hangs on the office wall a picture of Sapir
- ② hangs *a picture of Sapir on the office wall*
- ③ #hangs on an office wall a picture of Sapir
- ④ \*hangs a picture of Sapir on an office wall
- ⑤ #hangs on an office wall the picture of Sapir
- ⑥ \*hangs the picture of Sapir on an office wall
- ⑦ ? hangs on the office wall the picture of Sapir
- ⑧ ? \*hangs the picture of Sapir on the office wall

→ \*④⑥⑧ Maximize Matching Effects 違反、?⑦⑧ : [- definite] が残る

→ 場所格倒置構文の Spec, TP 位置の PP は definite : # ③と⑤は unacceptable

(21)で、Aspect Phrase の Spec に PP (on the office wall) が移動すると、Aspect head の格素性[- Case]が照合される。もう一つのアスペクトにかかわる素性は PP の素性[+ definite]と match せずに残り、DP (a picture of Sapir) との間で Agree によって照合されると考える。他方、Aspect Phrase の Spec に DP (a picture of Sapir) が移動すると、Aspect head の素性[- definite]が照合される。格素性[- Case]は DP がもつ格素性[+ Case]と match せずに残り、PP (on the office wall) との間で Agree によって照合される。このあと、T が Merge して Spec, TP に PP が移動すると (20a) が派生し、DP が移動すると (20b) が派生する。(20a) では T の  $\phi$  素性(と格素性)の照合は Agree によって行われる。

ここで、PP と DP の definiteness のすべての組合せと可能な語順を確認すると、(21) の図の下の①～⑧のようになる。\* を付した④⑥⑧は Maximize Matching Effects 違反で容認されず、? を付した⑦⑧は Aspect head の素性[- definite]が残るので非文法的である。この後《場所》と《存在物》のいずれかが Spec, TP へ移動して、倒置構文あるいは非倒置構文を派生する。ここで、p.45 下にメモしたように、PP が Spec, TP へ移動する動機は EPP 素性の照合しかない。DP のように  $\phi$  素性を照合することはないからである。ここで、EPP 素性の正体を、Rizzi (2005, 2006) に従い [+aboutness] とする。動詞句内に definite な phrase と indefinite な phrase がある場合、素性 [+aboutness] を持つのは definite なほうである。# を付けた③⑤はこれに反して容認されない。以上の議論が正しいとすると、場所格倒置構文の PP は definite, DP は indefinite となる、つまり①と②だけが残ることになる。

この予測が正しいか、存在を表す場所格倒置構文の PP と DP の可能な組合せと容認度を確認すると(22)のようになる。

- (22) a. On the office wall hangs the picture of Sapir.  
 b. On the office wall hangs a picture of Sapir.  
 c. ??On an office wall hangs the picture of Sapir.<sup>3</sup>  
 d. ??On an office wall hangs a picture of Sapir.



(22)のデータは、PP が definite の場合に限られることを示唆する。また、(23)に示したように、場所格倒置構文の例を数多く示している久野・高見 (2007) や高見 (2012) を見ても、そのように結論づけてよいと思われる。

- (23) 久野・高見 (2007), 高見 (2012) の例も PP は definite<sup>4</sup>  
 DP は基本的に indefinite (存在の there 構文と同じ)  
 (22a) の definite DP は「不定」の解釈の可能性あり (cf. 鈴木 1977,  
 Rando and Napoli 1978 : リスト中の任意の一つを指し「不定」)

他方、DP は definite (a の場合) でも indefinite (b の場合) でもよいことを (22) は示しているが、次に見る存在の there 構文の場合と同様、原則は indefinite であると言ってよい。(22a) のように definite な場合でも、鈴木 (1977) や Rando and Napoli (1978) で論じられたように、リスト中の任意の一つを指す可能性があり、その意味では indefinite の解釈があり得るからである。したがって、(24)に示したとおり、存在を表す場所格倒置構文の動詞句(21)の Aspect head がもつ二つの素性のうち、[- Case] は常に PP が照合し、[- definite] は常に DP が Agree によって照合すると結論づけてよいと思われる。

- (24) 存在を表す場所格倒置構文の Aspect head がもつ二つの素性 :  
 [- Case] は PP が照合し [- definite] は DP が照合

次に、存在を表す There 構文(25)の派生を考えよう。

<sup>3</sup> この文が容認されるとすれば、an office wall がどこのことか不明で、有名な the picture が所在不明という謎めいた状況を表すとき、という判断をインフォーマントから得た。

<sup>4</sup> 久野・高見 (2007 : 273) は下記 i) の例を示しているが、筆者が調査したところ、昔話で用いられるのは i) よりも ii) の there 構文のタイプが多い。

i) Once upon a time in a faraway land lived a contented prince.

ii) Once upon a time in a faraway land there lived a king who was married to a beautiful queen.

(25) 存在の There 構文

- a. There hangs on the office wall a picture of Sapir.
- b. There hangs a picture of Sapir on the office wall.

(Aissen 1975 : 1-2)

この構文は、(26)にまとめたように、(a),(b)ともに、Aspect Phrase のもつ素性の特徴を、場所格倒置構文や非倒置構文のそれと共有し、したがって、存在を表す There 構文の基本構造は、場所格倒置構文のそれと同じ(21)になると想定される。

- (26) 存在を表す There 構文の AspP は、場所格倒置構文や倒置しない構文の AspP と共通；違いは PP も DP も [+aboutness] を持たない点（「研究室の壁」について述べるものでもなければ「サピアの写真」について述べるものでもなく、「研究室の壁にサピアの写真が掛けてある」状況全体を聞き手に提示する文）

そうすると、存在を表す There 構文の派生は(27)のようになると考えられる。

(27) 存在の There 構文の派生

- a. (25a) の派生：(21)で Spec, AspP に PP (on the office wall) が移動
  - Asp head の [- Case] を照合
  - Spec, TP に there が Merge：T の素性 [+aboutness] を照合
- b. (25b) の派生：(21)で Spec, AspP に DP (a picture of Sapir) が移動
  - Asp head の [- definite] を照合
  - Spec, TP に there が Merge：T の素性 [+aboutness] を照合

場所格倒置構文の基本構造において可能な語順は(21)の①と②であった。したがって、この基本構造を共有する There 構文の可能な語順も①と②を予測す

る。このあと T head が Merge し、その Spec に there が Merge するわけであるから、(27a) に示したように PP が DP より先になる場合もあれば、(27b) に示したように DP が PP より先になる場合もある。こうして、PP と DP の語順が、(25)の例のようにどちらでもよいことが説明される。

There 構文が場所格倒置構文や非倒置構文と異なるのは、(26)の後半に示したように、There 構文では PP も DP も [+aboutness] を持たないことである。これは、there 構文は「研究室の壁」について述べるものでもなければ、「サピアの写真」について述べるものでもないという意味に反映されている。そうすると、PP と DP のどちらも T head のもつ素性 [+aboutness] を照合できないため TP Spec に移動することはない。そこで、TP Spec には there が Merge する。このようにして派生するのが存在の there 構文である。<sup>5</sup>なお、T のもつ  $\phi$ 素性は DP (a picture of Sapir) との間で Agree によって照合される。

ここで重要なのは、(28)にまとめたように、DP が indefinite に限られる点である。そうでなければ Aspect head の素性 [- definite] を照合できないので、Aspect の Spec に移動する動機を失うからである。

- (28) DP の素性は必ず [- definite] : [+ definite] では移動して Asp head の素性を照合する動機がなく、DP が Spec, AspP に移動する可能性が無い  
→存在を表す there 構文の definiteness restriction (Milsark 1974)

確かに、(25)の交替を許すのは DP が不定名詞句の場合であり、存在の There 構文にかかる definiteness restriction として Milsark (1974) 以来よく知られている。<sup>6</sup>

<sup>5</sup> there は DP (この例では a picture of Sapir) の D 素性だけが移動したものとすると分析を Hazout (2004) が提案しているが、その可能性はここでは追究しない。

<sup>6</sup> There 構文の DP は不定名詞句に限られるという definiteness restriction あるいは definiteness effect と呼ばれる制約がある (Milsark 1974, Safir 1985, Lumsden 1988, Belletti 1988 等)。これに対し、定名詞句が生じる場合は、該当する事物のリスト内の一部が挙げられているという list reading になるので、次のような文を list sentence という (cf. Milsark 1974, Rando and Napoli 1978, Lumsden 1988)。

### 3.2. 出現を表す場所格倒置構文と There 構文

他方、(29)～(32)のような出現を表す場所格倒置構文や There 構文がある。後者は Milsark (1974) では *outside verbal existential sentence*, Aissen (1975) や Coopmans (1989) では *presentational there-construction*, Rochemont and Culicover (1990) では *presentational there insertion* と呼ばれ、PP が DP に先行する語順のみ容認される。

- (29) a. *Onto the sidewalk fell a little boy.*  
 b. *A little boy fell onto the sidewalk.*

- (30) a. *There walked into the bedroom a unicorn.*  
 b. *\*There walked a unicorn into the bedroom.*

(Milsark 1974 : 246, 250)

- (31) a. *There ran out of the bushes a grizzly bear.*  
 b. *??There ran a grizzly bear out of the bushes.*

(Aissen 1975 : 1-2)

- (32) a. *There flew into the air the dog and the frog.*  
 b. *\*There flew the dog and the frog into the air.*

(藤本 2009 : 86)

まず、出現を表す場所格倒置構文(29)の派生を考えよう。図(33)は(21)と同

---

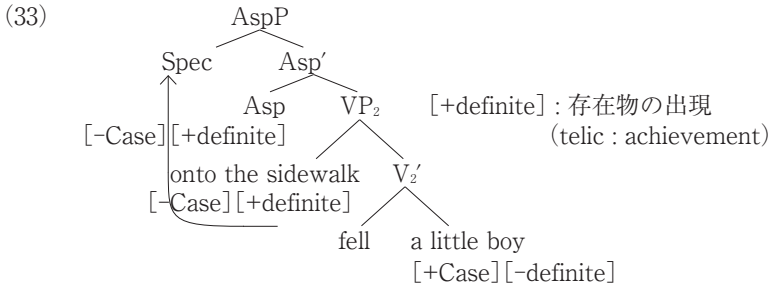
i) *There's the University of Stroke.* (Lumsden 1988 : 110)

ii) *There is my aunt from Worthing.* (ibid.)

鈴木 (1977) によると、リスト文の NP はリスト中の任意の一部を指しているの、リストの中では不定であり、定性条件に違反していない。Belletti (1988) は、不定名詞句とリスト文の NP は一部であるという点で共通しており、共に部分格 (*partitive case*) を与えられると仮定する。次の例では、NP がたとえば今朝の朝刊を指している場合には容認される。毎日発行される朝刊の一つだからである。

iii) *There is the newspaper on the table.* (Belletti 1988 : 16)

様、《存在物》、《場所》、Aspect head の順に Merge したところである。



Asp の素性

[- Case] [+ definite]

AspP 内の可能な語順

cf. maximize matching effects

- ① into the bedroom walked a unicorn
- ② \*a unicorn walked into the room
- ③ ? into a bedroom walked a unicorn
- ④ ? \*a unicorn walked into a bedroom
- ⑤ #into a bedroom walked the unicorn
- ⑥ #the unicorn walked into a bedroom
- ⑦ into the bedroom walked the unicorn
- ⑧ \*the unicorn walked into the bedroom

→ \*②④⑧ Maximize Matching Effects 違反、?③④: [+definite] が残る

→場所格倒置構文の Spec,TP 位置にある PP は definite: # ⑤⑥は unacceptable

出現を表す場所格倒置構文は、存在を表す場所格倒置構文とはアスペクトが異なる。存在は静的、状態的で atelic なのに対し、出現は《存在物》が移動して、ある到達点に到った telic な状況を表す。これを Aspect head の素性の反映と考えると、存在を表す場合が [- definite] なのに対し、出現を表す場合は [+ definite] と考えられる。

(33)で、Spec, AspP に PP (onto the sidewalk) が移動すると、Aspect head の素性 [- Case] と [+ definite] が照合される。この段階からさらに、PP (on the office wall) が TP Spec に移動して T のもつ EPP 素性 [+aboutness]

が照合されると倒置構文 (29a) が派生し、DP (the little boy) が移動すると倒置しない (29b) が派生する。なお、倒置構文 (29a) では、T のもつ  $\phi$  素性は DP (a picture of Sapir) との間で Agree によって照合される。

ここで、PP と DP の definiteness のすべての組合せと Aspect Phrase 内の可能な語順を確認すると、(33)の図の下①～⑧のようになる。結論として、(33)の最後にまとめたように、\* を付けた②④⑧は Maximize Matching Effects 違反であり、? を付した③④は [+definite] が残るので容認されない。このあと PP または DP が TP Spec に移動するが、PP が TP Spec へ移動する動機は [+aboutness] の照合しかない。すると、PP は definite になるので # 付きの⑤と⑥が排除され、①と⑦だけが容認される語順として残る。

次に、(30)～(32)のような出現を表す there 構文の派生を考えよう。(34)にまとめた通り、このタイプの there 構文の Aspect Phrase の構造は(33)と共通で、可能な語順は①と⑦だけである。

- (34) 出現の There 構文の派生：Asp head の素性は (33) と同じ  
 There 構文の可能な語順：There + 「AspP 内の可能な語順」①と⑦  
 → There V PP DP / \*There V DP PP

このあと T が Merge し、T の EPP 素性 [+aboutness] を PP も DP も照合せず there が Merge する。T のもつ  $\phi$  素性は Agree によって照合される。したがって、(34)の最後にメモした通り、There + 動詞のあと、PP DP の語順だけが許され、逆の語順 DP PP は許されないことになる。

### 3.3. 場所格倒置構文と話題化構文

最後に、場所格倒置構文 (35a) と話題化構文 (35b) の違いを考察する。さらに、(35b) と (35c) の非対称も説明する必要がある。

- (35) a. On the office wall hangs a picture of Sapir.  
 b. On the office wall, a picture of Sapir hangs.







多いので、先に TP Spec に移動するのは PP ではなく DP でなければならない。また、ii) のように PP が [+aboutness] を持たない場合は、照合できる T の素性の数が DP よりもさらに少なくなる——というより、この場合は PP が移動して照合できる素性がない——ので、容認度が落ちるのは言うまでもない。(37c) の iii) では、DP が TP Spec 位置のまま、隣接する Topic head の [Top] 素性が照合されるので問題ない。場所格倒置構文から DP を話題化できないのは、以上の理由によると説明される。

#### 4. 結び

本稿の結論は(39)にまとめたとおりである。

- (39) a. VP の構造 (8) : 主題階層 + VP-shell + split VP + Aspect Phrase  
 (加賀 2001 and Kaga 2007 + Travis 2010)  
 b. 目的語の選択 : Telicity を決定する項 (〈場所〉 or 〈存在物〉)  
 c. Telicity を決定する AspP head の definiteness 素性が語順に影響

本稿では英語の VP の構造を議論し、(39a) にあるように、構造 (8) を採用した。VP-shell を構成する二つの VP の間に機能範疇 AspP が存在し、その head は素性 [± definite] と [± Case] をもつ。次に、動詞が取り得る二つの内項のうち、目的語名詞句になるのは、(39b) に示したように、動詞句のアスペクトつまり telic か否かを決定する要素であることを議論した。このとき、AspP head のもつ素性 [± definite] が決定的な役割を果たすことを論じた。その結論をまとめたのが (39c) である。

#### 参 照 文 献

- Aissen, Judith (1975) Presentational-*there* Insertion: A Cyclic Root Transformation, *CLS* 11, 1-14.  
 有村兼彬・北峯裕士・小林敏彦・福田稔・古川武史 (2009) 「英語学へのファーストステップ (改訂版)」英宝社、東京。

- Baker, Mark C. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Belletti, Adriana (1988) The Case of Unaccusatives, *Linguistic Inquiry* 19, 1-34.
- Bobaljik, Jonathan (1995) *Morphosyntax: The Syntax of Verbal Inflection*, Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist Inquiries: The Framework, *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin et al., 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001a) Derivation by Phase, *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001b) Beyond Explanatory Adequacy, *MIT Occasional Papers in Linguistics* 20.
- Citko, Barbara (2014) *Phase Theory: An Introduction*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Coopmans, Peter (1989) Where Stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English, *Language* 65, 728-751.
- 藤本滋之 (2009) 「主題関係に基づく結果構文の分析」『西南学院大学英語英文学論集』49, 79-106.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser (1993) On argument structure and the lexical expression of syntactic relations, *The View from Building 20: Essays in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser (2002) *Prolegomenon to a Theory of Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hazout, Ilan (2004) The syntax of existential constructions, *Linguistic Inquiry* 35, 393-430.
- Hirakawa, Yahiro (1994) Case checking and a double nominative construction in Japanese, ms, McGill University.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 加賀信広 (2001) 「意味役割と英語の構文」米山三明・加賀信広『語の意味と意味役割』第Ⅱ部、研究社、東京。
- Kaga, Nobuhiro (2007) *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, Kaitakusha, Tokyo.
- Koizumi, Masatoshi (1993) Object Agreement Phrases and the Split VP Hypothesis, *MIT Working Papers in Linguistics: Papers on Case and Agreement* 18, 99-148.
- Koizumi, Masatoshi (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.

- 久野暉・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味：生成文法と機能的構文論』 開拓社、東京。
- Larson, Richard (1988) On the double object construction, *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Lumsden, Michael (1988) *Existential Sentences: Their Structure and Meaning*, Croom Helm, London.
- Milsark, Gary L. (1974) *Existential Sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT. [Published by Garland, New York, 1979]
- 水本豪 (2005) 「局所的経済性再考」 *Kyushu University Papers in Linguistics* 25-26, 43-64.
- Radford, Andrew (1997) *Syntactic Theory and the Structure of English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rando, Emily and Donna J. Napoli (1978) Definiteness in *there*-sentences, *Language* 54, 300-313.
- Rizzi, Luigi (2005) On Some Properties of Subjects and Topics, *Proceedings of the XXX Incontro di Grammatica Generativa*, ed. by L. Bruge *et al.*, Cafoscarina, Venezia. [available at <<http://arca.unive.it/bitstream/10278/244/1/Atti-2-11s-Rizzi.pdf>>]
- Rizzi, Luigi (2006) On the form of chains: criterial positions and ECP effects, *WH-Movement Moving On*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rochemont, Michael S. and Peter W. Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Safir, Ken J. (1985) *Syntactic Chains*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 鈴木英一 (1977) 「存在文の意味上の主語と定性・不定性」『山形大学紀要 (人文科学)』 8, 81-106.
- 高見健一 (2012) 「英語の場所句倒置構文と There 構文」日本英文学会九州支部第 65 回大会特別講演 (九州産業大学)
- Travis, Lisa deMena (2010) *Inner Aspect: The Articulation of VP*, Springer, Dordrecht.
- Uesaka, Miwako (1996) *The “te-i-ru” Construction in Japanese: Interaction between Aspect and Syntax*, MA thesis, McGill University.
- Van Valin, Robert D. (1999) Generalized semantic roles and the syntax-semantics interface, *Empirical issues in formal syntax and semantics 2*, ed. by F. Corblin, C. Dobrovie-Sorin and J.-M. Marandin, 373-389, Thesus, The Hague. [available at <[http://linguistics.buffalo.edu/people/faculty/vanvalin/rrg/vanvalin\\_papers/gensemroles.pdf](http://linguistics.buffalo.edu/people/faculty/vanvalin/rrg/vanvalin_papers/gensemroles.pdf)>]

